いたことが克明に記されている。従来より、ヘボンとシモンズとの交流は知られていたが、この史料の記述からはシモンズがヘボンの片腕として施療所を手伝っていたことがうかがわれる。その他、本史料には外国人医師の氏名としてヨムパン、マイルの二名が、日本人医師の氏名として貫斎、秀英という二名が記述されていた。残念ながら現段階においては、この四名についての正確な特定はできていないが、今後の調査により人物の特定ができれば、ヘボンをめぐる新たな事実が浮かぶものと思われる。

『米利堅平本常用方』の第一次史料としての信憑性という点について触れると、前述のように原本の筆者等が記載されていないために、現段階ではヘボン施療所の公式記録であると断定することは困難である。しかし仮りにヘボン施療所の記録ではないにしても明治三年当時の医療を知る貴重な史料であると考えられる。今後本史料の信憑性が他の史料によって裏付けられれば、医師としてのヘボンの姿のみならず、明治初年のアメリカ人医師の治療方法がどのようなものであったかが明確になるものと思われる。

（昭和六十三年九月例会）

池田　多仲

深瀬　泰旦

我々が「池田文書」と呼んでいるものは、東京大学医学部初代綜理池田謙斎の子孫にあたる、池田允彦家に保存されていた約四千通に及ぶ文書類である。東大医学部の前身である幕府医学所関係文書、およびその関係者からの書簡、ならびに池田謙斎宛の書簡がその主なものである。これらの文書は去る昭和六十一年七月以来、我々「池田文書研究会」のメンバーによって、整理、分類の手が加えられ、まだ目録の作成までには至っていないが、ほぼ整理が完了している。

「池田文書」は、池田謙斎関係の文書類がほとんどを占めているが、謙斎の養父であり、お玉が池種痘所の設立に関わった池田多仲に関係のある文書が二、三含まれている。「池田文書」に含まれる池田多仲関係の文書は、伊東玄朴や大槻俊斎などから多仲にあてた七三通の書簡と、多仲自身の筆になる『備忘録』（文久元年より慶応元年まで）と五通の文書である。これらの文書を中心にして、さらに『池田謙斎　プロイセン国ベルリン』（彩雲堂一九八四）に収載されている、ベルリン留学中の謙斎からの留守宅宛の書簡を参看して、いままであまり取り上げられることのなかった池田多仲について報告する。

池田多仲は文政三年（一八二〇）二月十三日に、津和野藩医である池田淳作（墓碑には淳策とある）の長男として石見国に生まれた。十九歳で江戸にでて、後に伊東玄朴の門に入った。この時名を玄仲と改めたといわれている。安政五年のお玉が池種痘所の設立に際しては、江戸にすむ八三名の蘭方医の一人としてその設立資金を拠出し、発足と同時に留守居役として種痘所に起居することになった。多くの門人の中から留守居役に選ばれたのは、彼が師の玄朴の厚い信任を得ていた証拠である。

文久元年三月三日に、はじめて種痘所俗事取扱出役が任命され、多仲は世話役に就任した。ついで五月二十六日には種痘所手伝に取り立てられ、五人扶持をたまわった。種痘所が西洋医学所と改称されたのち、十二月二十五日には西洋医学所手伝の骨折りによって、同所の講席において白銀五枚をいただいた。

翌文久二年閏八月七日に多仲は西洋医学所預をおおせつけられ、二〇人扶持に加増された。さらに文久三年八月二十六日には医学所頭取助手伝となり、緒方洪庵の死後頭取に就任した松本良順を補佐した。

種痘所の変遷にともなって多仲の歩んだ道をふりかえってみると、教授職についた記録を見出すことができない。「留守居役」、「手伝」、「預り」などの肩書からもわかるように、教学面ではなく、種痘所の運営面あるいは行政面にその力を発揮したのだと思われる。これは多仲の医師としての学殖に欠けるところがあったからではなく、玄朴の筆頭の弟子として、玄朴の右腕として、玄朴をおおいに補佐する必要からであった。元治元年八月十五日には、奥詰医師を兼務した。

慶応四年幕府の瓦解とともに医学所が明治新政府に引き渡されたのを機に、八月六日には安政五年以来住み慣れた種痘所を出て、下谷生駒前に家をかまえた。その後十月十日に鎮将府に召し出された記録があるが、それ以後の動静については明らかではない。ベルリンに留学中の謙斎が、父多仲の就職のため奔走している様子を、留守宅宛の書簡から読み取ることができる。維新前の役職からみて大学東校あたりに就職できればと、大学大丞の岩佐純に頼みこんでみたが、結果は不首尾であった。

浪人生活で無聊をかこっていた多仲は、明治五年に入ってからリウマチによる足の痛みを訴えるようになった。八月に入ってからは病状が悪化し、病床を離れられなくなり八月十七日に死亡した。行年五十三歳であった。はじめ駒込の大林寺に埋葬されたが後に谷中墓地に改葬された。寛厚院殿義山良忠居士と諡された。

村尾留器の『三省録』について

岩崎　鐵志

近世の、遠江長上郡小松村の医師、村尾留器（一七八九～一八五四）が記録した『三省録』が学界に紹介されたのは昭和七年であった。富士川游氏が『中外医事新報』（一一八〇号）に『三省録—付、村尾枳園』を載せ、子孫の一人村尾圭介氏が『文政末より天保年間に亘る痘瘡の流行状態を窺ふ』（『日本伝染病学会誌』六～七）と、『祖先と医業』（私家版）を著して、『三省録』の分析と留器の人間性について述べている。

『三省録』は正編四冊、続編二冊からなるものであったが、現在、正編第一冊めが無い。昭和七年時点でもそれが欠けており、富士川論文にも明言されているところである。

この内容は留器が診察した患者のうち、死亡者のみの病歴を収めたもので、記載事項は正続とも統一されていて「患者居村・名前（当主・続柄）・初見時の病歴と経過日数・投薬名・病状経過